うたた寝物語

藤原の君

四と符

並二

特別
へ12
4327
4

ユソリニモ
アトカラリ北十ウ
トヨノアカリ北九オ

上野宮 十八オ
三春御子北六ソ
(元宮ニ(ノ)産三十六モヨ
行正コレニ)
滋野真菅北九オ

流布本十一
巻ノ巻末二全

白二
紳二並
陽一並

先帝崩御ノ後
中務宮ニサヨリノ公コ
中アテ夫

朱雀院
大宮正頼室

わに ㇾセウ
ㇾルウ
本にと修ㇾ
なしおオ
ウ

ようもあり
可去
ㇾ吸ㇾ
ㇾくあり

こゝろにくからぬさまなどぞ
三份考

憲 へ 12
源 4327
巻 4

大政大臣ノ高雅父カト
疑ヒハアラス 今廿八十二ウ
実忠ノ父ニ

昭和廿年四月一日寄
高田早苗氏贈

帝国 12
旧 4327
巻 4

昭和廿四年四月一日寄
高田早苗氏贈

三日ハ雨ふりくらし。客よくくるのする
そのゆふべのほどにぞ。ものもとめまいりたる。
ものくるかしこまりいたりなんどいふ
侍門
ものの人よりて。
よねもちくん。源氏まいりたる。
正頼
おほぬし殿ふりそそぎたるを
人よりて。せむ。前右大臣
ものの人のものむつよをむつ
ふりそそぎたるに。左大臣
ものみつ露のこぼるる
へみもうちいりぬ中納言行忠

一九郎宮ノ十郎
大夫ノ十一郎

今九 七ル兵部少将ヲ紙トス

八郎ハコヽニ名モナク年モナキハ書オトセルナルヘシ名ハ今思ヒハカリ難シ年ハ廿三カ廿四ナルヘシ

先帝トハサガノインヲ申シ其サガノ井ンノ后ノ御ハラノ女一ノ宮ハ正頼ノ室コノ室ノウミ玉ヘル大イ君ハ室ノ御兄ノ今ノ帝ノ御ニテ仁壽殿ニテコソ御セラウトノ今ノ帝ト去ルハ室ノ御セウト伝フ之今ノ帝ハ朱雀院ヘ

のちにハ八郎兵衛の佐ありける年廿六宮に
宮のすけにておはする年廿五七郎
侍従にておはする年廿三八郎大井殿の御子なり
御式部のせうにて殿上人にてある年廿二なるのみこうら
君十郎兵衛のせうにおはる人ちうしやう大井殿の
御子にて十一郎ちうしやうのをんなのみこの御
ことハ先帝のみかどの今の御みかど
みかど仁壽殿のみこ女三人七人のおほいまの母宮
の女御年廿一大井殿のおほいきさいにあれ
さるを中納言あり
君ハおほい宰相中将の年

十九になる君右大臣殿の次郎左近の中将源の
さねよりのきみとし十八なるのかくのかみ
君をんのかみの君に年十七なる君太政大臣
藤原のあそんの七の君なり
兵部卿の君と藤原のりとしのきみ
十になるハ男なり九の君おかしくておはしける
十二十なるに十一大井殿の御子十一
十二の九になるを十三なるをまつ
十四の君けにて七そなれるの
これハしもつかたの女
めぐりまつるよりおもしろけれ

夏宰相ノ名可考

右ハ誤ニテ左大臣源忠純ナルヘシ

(紺同) 一は八の君イ 一本おほいとの佐殿十一 十二君ハ年九になるの

のちかくハ式部卿宮の御むすめ年廿六宮に
尚侍の君と申すとし年廿五女宮はらからしとき七郎
君とかたらへすと乃君の年八郎大納言の御むすめ九
郎式部のせう殿と人をしよきとし年廿二女の御うちに
君十郎兵衛のせう君と見ゆ人ちかくすといふ太大納言の
御ちかく十一郎ちかく御は宮のちかく女の御ちかく君の
いとこハ宮のせうとの今乃みかとようつりたまふ御
給ふかり。中宮人。女三人七人の女ちかく宮の母ぞ。
一の女御年廿一。大納言の宮ちかくにきさきたち院の
ちかく乃中宮と宮の宮乃宮とし廿一宮ちか
宮三君太の大納言乃宮宰相の君の年

亥宰相ノ名可考

一は八の君イ

（緋同
一本おりいとの佐殿十一
十二君八年九ころよの

十九宮は君右大臣殿の頭弁左近の中将源の
なりのぶのかミとし十八。母のうへ乃なれ
君ふんの御乃うへなる年十七。三君君太大臣
藤原のむすめなる大郎うへのうへ七の君大宮
頭殿ちかく宮りんめるに藤原なるへとしのうへかたき
十宮ゆかしく男宮ちち九の君わかく女めてたきとゆ
十二十なるとらと女十一大納言乃ゆかしく十一右
十十二の九。とよそこ乃ゆかしくの十三なるゆきそて女い
十宮の君けそ女七そなれかしくの御とし女六よめん
れうしきうて上てかしくの御とこ女御とも
めぐしまつ。ゆくよかく宮とせ給ふなり給ひぬ。れ

妻

左大臣ハ曰十八ヲ忠恒

民部ノ今ヒ六ロ治実雅カ
ハ乃ハ正親ノ五女ナルヘシ

中にてうちさゝやきに、（おろ）
これをよおるとものくちもせ
母（女一）
せもうちうなくうちてさゝやきこれ悪いよ
これやうこと（民部）ろ中ねの
いの宰わおくこれあるこ（実忠）と
ううんとやわせと文（正頼）
これおもうくう（三枕）ろのくほてあよううこと久おうん
そうちうくこれ（きく）やりおろうんも。
のようく出方よううそんとみうろうよ。ほて文
のれおのとごうそ（とく）なうん

長柔の君てうつゝ毎（よう）
ううのうふら毎とい中の地くよふうせ文
つやれこく（のく）やりてこと（異）氏の給へてまこと（戯）言
とはの給とも。これうふらあそのそにうにうを
給へつゝと。うこともれいく人のうねこととろめ（始）
地をみて。ものわうとこそ。ふの人乃四中
よ。おめつもうこと地の給へい。ふ来うつぬ（真）
やれ。れをうつみてのまうすつ（のく）さ（らく）
うおうこその給うこそ地もれてこふえ
給へうこと。寧れおうつ（実忠）
うふうて（イテ）

所蔵者の印

実已 うのうちよ名ろうあとのこハ君うやと
みくく（ろ）さるるん（ろ）と（ろ）ゆくよて（ろ）ゑいとりくる（ろ）
世のハいろ来くろうろ（ろ）ろ（ろ）ゑん人のやくめもて（ろ）
そうゝれ公つの（ろ）ろ来こ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
ろうよとりくろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
ん（ろ）あくろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
てみたろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
みくゝ世（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
てゐろくろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）

ゆとめくくみもすてすこ給ろうきり。らのぬ
ゝ。ゐくろもらくゝゆとりくる父（ろ）ゝれゐゐ
ゐ。これとゆやかいくろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
えまくくまをゆり（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
らのゆりんつくの中（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
らのものくくのおとろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
くゐりいぐよゐはくくくろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
えくくえゐれ中れゐやゝくくのくろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
れくれ人よくくゝ。つゝみをの里。ゐくろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
大将いまゐゝ公（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
ゐくんとゐくゝ。くそ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）

何モシミ玉ノ墓モヤヘ作
ニテレルヤトミ人コソ子メ

今宮我君ノ書誤ル

ゆるしたまへとこにこそひとゝ思ひてあんなよ
これ人をあををそるうおろ紙のんおゝくみ
もえけみてくいさこんとあんさこえまれしさ中助
将をこあるさんぼ純そさもしおやれおやし
くさの給いもろうこのゆくこもろうそれよ
とをそをみるれ。まあやうみ中のゆくろひあさ雅
こをあんろひくゆえ給ひくこさろうをを給
をれさ我くおんとこそでいあこれん
やうのあうさうもりゆくうひまざうこをみい
ーもれて中おるう助純ろうひくうひたりく雅
をのうろ名ふさつれたへのうん

コレモ若君ハ我君ニヤ

みくこと。今つまんくまはみろ
うんあこれまはみろ
ふとイ懐ろばを色をあてお住
いをれと。まこうもきこめ
こ。い海ふくるしさ光りさいありと
ん。あうーしてきこんし。あうー
ふまあうよいれなみの神も住
ん中れ
助純そまんをこのうう神の父をみくありたのま
ん。ふとイこのうこ芸文乃ひいこの年中納言
正明
こくこえていこうひこ。文ろこのこえて

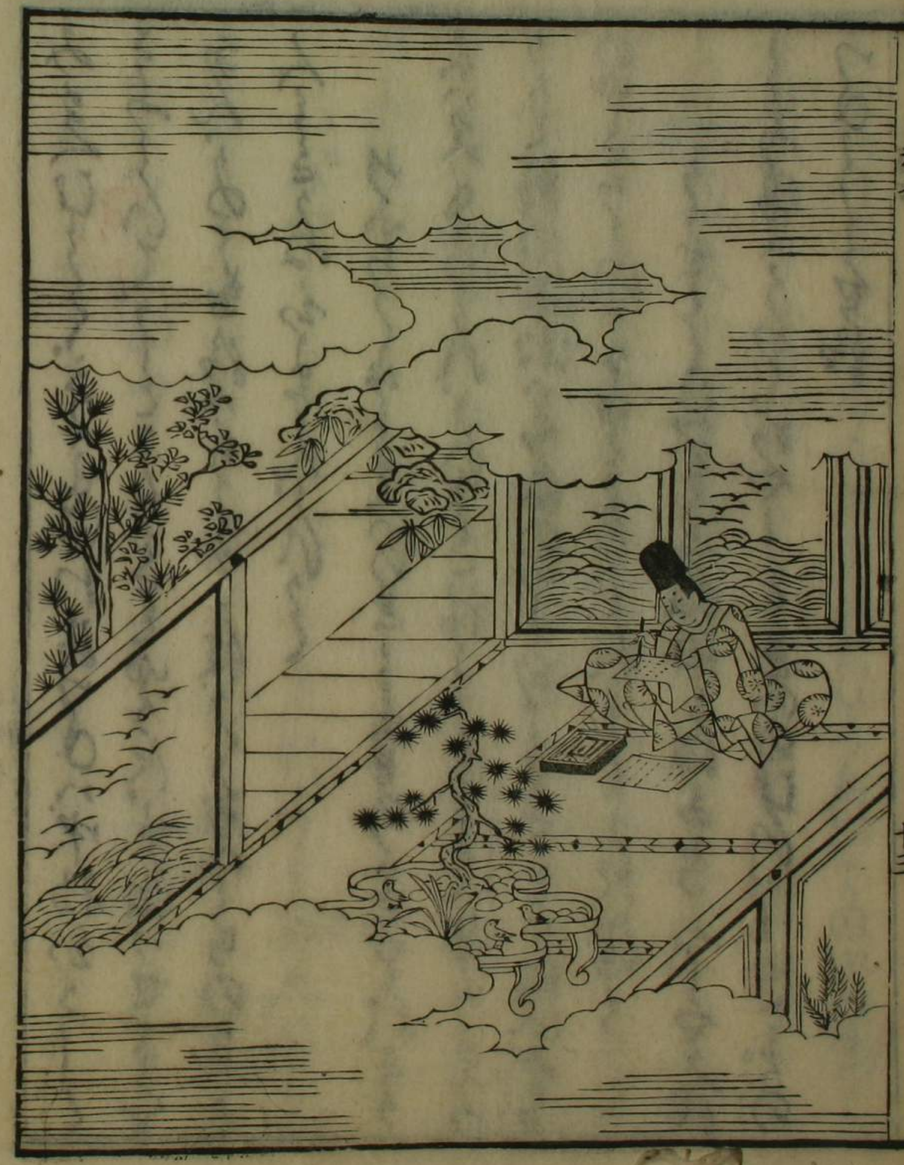
何セシ玉ノ墓ニヤ心得ニテルヤトニ人コソヲメ

のまゝ例なく（一本のまゝひかれぬなく）

あるよし、ある女をいみてさうらひしもやと云けとも、
のまゝ例なく、なうて二文字のことはかなし給ひけり。
それも此事くらうよくて見まいらせつかゝうそれ
わきに、若殿にぞうのおんかんの夜もよらひ給ひを
あかうそ十郎も源すゝをかまへと、うさえ
まへハ、すてらハやうして給ひなんそれよつかて見ん
いせうさうしうう給ひ、それよくすむ
さて難波の川をハあつて、川のあるいつ
れなと人はほくらんどあふなん給ひくらせると
てなりまへハ、若殿のそう給ひりかく、わらく文
とをいかれちをすりまへハ、ゆふか

なくく給ひて、これあるかやう紙みを給ひけれ
若殿のさうかさんとさんとみせなりてん
や、平中納言の君すりとめえ給ハらうて、いとを
さんれとて、きもろうさうけへハ、ちかくいふ
とうの御前もれりしぬかくて源宰相ハ御かの給
ものよりてもひくるこひほく、ゆめかりれそと
とくせまへと御んの給ひき、さかさくのいとれ
りうさくさ給ひける
若殿をかしせてかれ花桜風さふ君は
ませをやわかんこれとしれよくおしく、若殿は
御殿へせさ給へとらされハ、いてはさうさせる

民部々中将ハ実雅カ実乳カ
コノ実忠ノ兄二人アルヘシソノ
二人中イツレナラン



笑えもひつれと
一本笑えの〜トス

山ゆきもわすのうゑやくのいそう
き通ろうろうれおりうをめやはりのへをみのえう
ゐて、ゐたるて、み当初ろえりやふもろうき
ゐう海をうれと、さうくりやじまーけ当いるん、うくは
うもを治いくるの現、ゐのうくのいをを治うんなく
ゆてまう、おてえれーくもやー治うれそ、
ゐうくうる、寧れせう寧忠ろくゆえみれいーさふい
海いやひまへをもん

寧忠 もあてくたうーおをむ地をのをふいろ
らか思う海あく、おうまやのう代みこりうくふと
もうふのゐたるゆいゐをりまへくわれと当来う代

アテ文 らけゆう当よの代みうらのうをいされるい
つをのあそをうるん、とて治寧れて、うる
くくれーと治うんう、う寧忠ろんつく
も物治ーおまれうよううしもれや
ーうう海そんるひ、人みもうをえてれ
のうえうるん、とゆのうえ治つまとれしー

笠えをひつれと
一本笠えのへトス

山あゐこのかはやくのいそう
き初うつろれ（色）
出てゐ也ふ（色）
ひうら海なうれとうつくも
もを結ひくゐ初紙ひ
ゐまうゐ（実忠）寧れせうう
ゐいひまへをゐん

（実忠）
ちあくいてたうーみをむ地とのこふいう
らゐ思う海ゐくおうまやのうれゐこのうりうふと
もうふのゐをつのいほやとりうまへとわれて（ア）

こてこうりゐ地ふ（色）地うま表うぬやうり。
芸落うこうこうこまれこうよこうーゐんおとかせ。ゐうく
えうこうまれこうこうこもうーゐんゐやう
んとの結へとうれつまを
らけゐうまよの代みうゐのうをいこれるい
つこのあそこうるうんとて結寧れこ結てうりる
くくれーとゐりひうふ（実忠）うつくんつく
も地ゐ（ウ）結まれうれこれをうよゐうしもれや
しうこ海こうんるひうふみもうこうこえてれ
我純（ア）おゐうしーゐのうし紙のやしーふ
のうこうこうんとゐうふ（色）とれうりれし。

月のはりつき秋深き源宰相(実忠)中将のもとにてそらよ
りつゆおく草木の色ことなれど月にみがける秋の夜
哉と申侍しかば御前の花さらば月の名(比)よ之よりおくべきの
(実忠)花さらばみがける月の名(比)よりおくべきの
なくくそらにおもふ秋の夜の月(ヲ)はなにをかはおくべき
もろこしのうへもわが国(孫イ)の松の名(比)もこれをこそ
(実忠)
(本ユ)
(くの)
(ヲ)
やくもいづるみねの松風

(コユ)
と翁うるをそ(のイ)
(実忠)
おもふ川みぎはのやまぶきさくやこの
(コユ)
もとの秋のあるじ
(中島)
(ばイ)
(仲純)
(鳥)
(仲純)

侍従ノ正頼ノ七郎
アテ宮ト同母

民部ノ二人心エズ
六ノ君ハ忠雅ノ妻
七ノ君ハ忠俊ノ妻ナルベシ

左卫ちカミハ多奈清正

絆本山もトス

こゝろと書誤ル中ノ君ハ上ニアリ

宮腰四人 太郎忠純 二郎師綱 三郎如光

中君北三の四君北十ニハ三君八北一ニ。三君北二ナレハ中君北四。四君北一ニ

おとこたちの人みな前にて雪いと高し。ふみ
つくりなどして、ゆきのやうをかしきほどに、
さやうの事ども、藤原清正
いとよくしりたるものにて、いひ
たてまつりたるこそ、いとをかしけれ。
ものなどいひたるも、いとよくあひ
たるやうなり。ゆきのこと
ろをかしきほどに、ふみ
つくりなどして、ゆきのやうをかしきほどに、
さやうの事ども、藤原清正
いとよくしりたるものにて、いひ
たてまつりたるこそ、いとをかしけれ。
ものなどいひたるも、いとよくあひ
たるやうなり。ゆきのこと
ろをかしきほどに、ふみ
つくりなどして、ゆきのやうをかしきほどに、
さやうの事ども、藤原清正
いとよくしりたるものにて、いひ
たてまつりたるこそ、いとをかしけれ。
ものなどいひたるも、いとよくあひ
たるやうなり。ゆきのこと
ろをかしきほどに、ふみ
つくりなどして、ゆきのやうをかしきほどに、
さやうの事ども、藤原清正
いとよくしりたるものにて、いひ
たてまつりたるこそ、いとをかしけれ。
ものなどいひたるも、いとよくあひ
たるやうなり。ゆきのこと
ろをかしきほどに、ふみ

上野宮ニ 今四十二ニ出

廿三ニ多奈キヨ正

おとこたち大井殿の太郎君年十六にて給
ひんとのまんりしのやしろ寫のおくの殿にはす
こゝもし十あまりのくらにさらしかへりは殿には
なむて給ぐまでもせもひろしく本をそとへし
ほとゝの侍従おほきた大井殿君ゆるし給はせ
こゝからやとかねしをたかりちん殿をしにくす
こ給ふらいと御わらかみのらしら中務の君給く
のくらせくの御らしのまゝの若うり年廿二
中くまちらいぬのはつるのにん。ぬんりしの中く殿
宰相殿君はくこのきとし廿二にてまふたねの
三郎きみりころの中くたりつくれ田

の君こそ年廿。源宰相のきみみつくてみな
つきのまへそとめてこにおとりりけのみこハ
ねひしきまうらんとゆくおゆりせる。かいていま
よにありかんならぬみこくらこれ殿のとおはしき。
とこし我ともせんとてめゆもゆひらいてとかく
ねの家よりこく我をらんよめひたつくら思ひ
うらんすむしよのまくいまちおりけれよゆへにて
給ふくにこれもくつくよせり給りこのみこさり
とも我とみこくほよの通給ゆこんやそしゆかれを
りハ八君とやめ給とこてこれすりんと給給入に。
おほ寫つのきよみなまり給そこてめてゆきろこえくの

上野宮ノ今四十二丁

こまとハ書誤丸中ノ君ハ上三丁ニアナタバラ
宮腹四人 太郎忠紀 二郎師紀 三郎助紀 四郎貫紀

やとも 絆本山もトス

おとこたちの大みき給ひて、元年十六日の夜れいのうんとにんじんとのみ給ひて、いとよく酔ひ給ひぬるのち、藤原清正
さゝやかなる（い）硯ばこをとり出でゝ、二枚八君
おとこにさゝげ給ふ。いとひろうすゝ未ま（ろ）そうとつゝ
けるものなり。おとこ大井殿ぢかうおはしまして、ゝ
とやらやうにもおぼしめしたるべかめり。おとこ
こゝろえてやうやうにかきつゞけ給ふ。對のうへ
のこゝろのおもむきもうちそうり。年ふかう
やうこゝろづかひのにんにんのにほひ、
宰れ殿ばらのこゝろ三の君ぢ二れ也ことゝもおぼえ
三郎うちれいのやうにもあらず、

の君ことに年ふかう、源宰相のことなどうちみだ
つものにて、野
物のこゝろまつことをみるにも、
ゝにあるかんらめみこれ殿ひとをを、
とうち（そ）我ものせんとてめやすきのみをい
ねの家よりやうくぶ我をうんよめ（ろ）
うえるむしのまゝにこれこんく
給ふ。これ（い）
とも我とみうち給ひて、このみこうち
り。八ぢ（い）ゝ給ひて、ゝ
ぢのうちみ（ち）給ひて、ゝ

（紙本朱ノ字アリ）
口一本ココニ米ノ字アリ
一日ノ道元清本皆ナシ
一月ノ誤ニヤ

本居日
そうまい氏俗の名ニ下七
五丁ニ見ユ

いてくちへきこもの
一本いてくちにりのよ

ひとつひとつそのそのゆりこのねくさ
られたるこうおりこれ
しねんことにこれとう
かもれるかうへしの
しの人のまうめそせよ
しこれそはうんつみ
あり、ゆきのうへ山たる
れることを十人ばかり
つるうへそうのうへ
ゆきそのいへもの
してひとよりよう

そうふつと
本々〳〵色はトス

ねことうたうかへ紙を
ねはおりたうて、ねうこ
て、うきれかねよ
ねかいたうさし
ふりて雨とうせよ
のうへ女ねそくゆみそん
女のことももうえ
ますう、庵のねそう
かねそくれ車のう
ふうこと思こたま
つそふうこと

道日色曲本ノマヽ

道左旨朱モテ長点ヲカケタルモ淺井ノ本ニカクアルニナラヘリ但又紺本ニハ此長点アルコトナシ

道元日朱ニテ長ニ改ムルモ淺井ノ本ニカクアルニヨリ但又紺本ニハ此長ニアルヿナシ

わらひて此ふたりつゐに一の
うた成をよめり。夜のふけ
うくきくのをれをうく
夜こゑわれうちおもひすみをくら
らくたうそうつこうもらくせらくそく
のめたちとしてしうもたつてこゑぬう
らくくさうしうえ例の海月千鳥足老
しうのりてをうくちうくうつ
年うつゐり海うをしうをよすんてうぬう

七夕とよのあうしてぐうちを
みのりせんくそくをいりてぐうれうち
のこくふうあうそうちうこうち
れめくそしろこの神(カミ)の
こあうりをうぐうりの神よも老門(カドニウシ)の實(ミ)の
みくくうをうんそぐうそいうう
のうこもうもうこれ冬(カリニウシ)うひこ神(カミ)
仏(ほとけ)世のあいまうぬりのやうこもうえ
うこれうにぬ(ガ)ふめうよくぐうりの
結仏のあんいのうアラシシ
よううをうくく

絆本ハ朱長点ナシ

江ノ役夫ハキコエタルヤウナレト本文ノモノ〳〵キコエズ又ヨウ〳〵モキコエズ

絆本朱点ナシ

工野よ

紳本ニ朱長点ナシ

紳本朱点ナシ

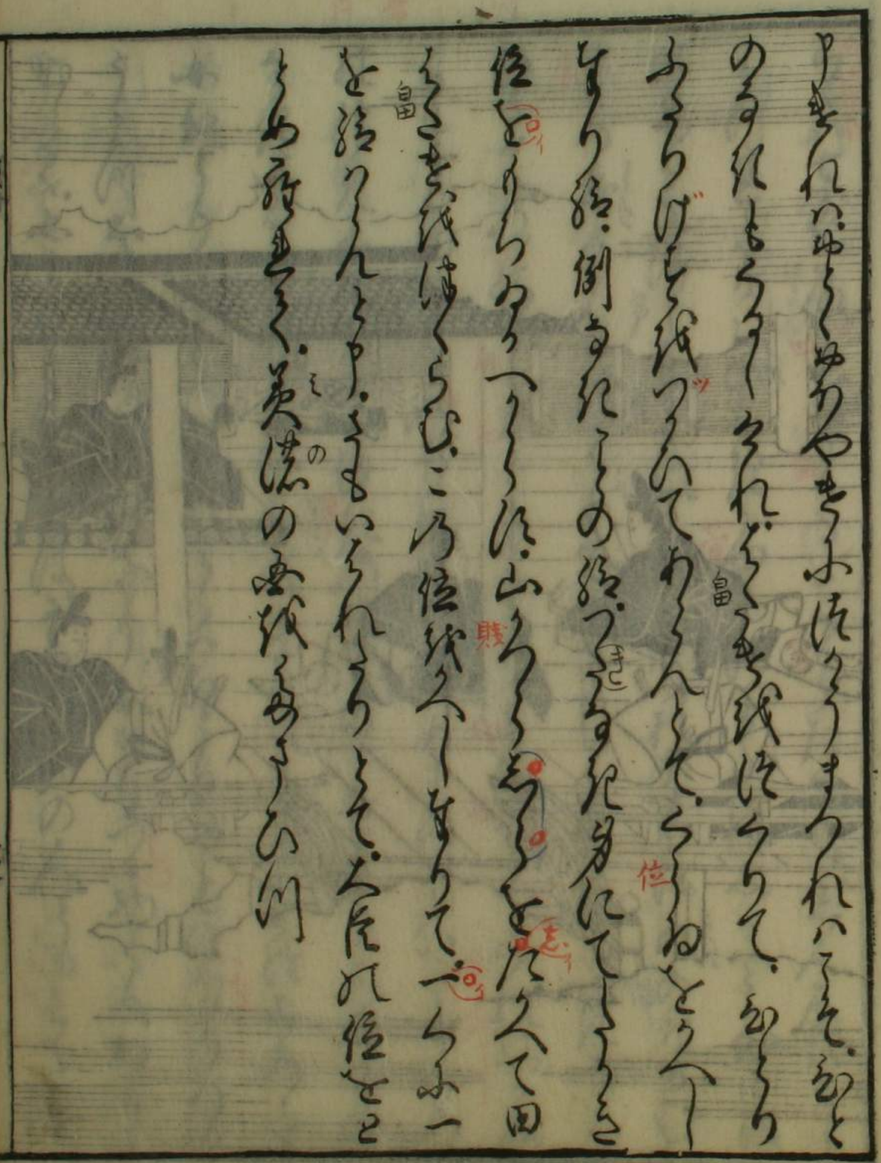
(illegible)

(illegible)

(illegible)

道九旨たゞよるく〳〵て、
たゞよあるしてハ誤り
下ノ九九ムヲミロ

道九旨たゞおくゝてゝ
たゞおゝしてハ誤り
下ノ九九ムヲミロ



つまはしく、くらはけて、くれのあした〳〵れてさは
はえつきて、ぬれ〳〵ぬれそてくち給へるは、む
か車よりおりしかはきそてゐたくさわり、はちかうとも
まゐらりてきれまさへてくわらくてはゝ色給ふ。
これはて家にほうようの人ゝすくし給ふね
と、これおもくなみたまいらくしあかりかれとも。
せえ給たゝ、りすかし。せかはし〳〵かりうの家
のうち給ふ。うけたまはりひせしともりて定宗を
まりにかきたる家うそれてれうるを清くして
はくさ家の内れてとおもへきさうてゝし。
まれ人の娘たれくわせくつひ、おやうくさせ

つひたかくしもおやてゆうるしぬりのさゝく
のことのつきすくぬりのくにすくいつてと
おはかれは、はて家の内かよはなれ家の内まてらて、家
ませての給ひことこともさと。まかりさし姫
君は、とし月かえさせんとふみ給ひし海りてか
ん。えいくとこわすられりしかみんや。おもひもは
さて給ふん。うちとの人まくんとみかさす
わうせしつききよしまかこうはとしも。家
の内よるれはうなし、門のんすらめともまうさ
のはなり。家の内のうけふひとあらはし給ふ家の
きんさらのおもてかへしまれ給ふそてはし給

ノチシノオトトウ ソテ宮蒼
廿四オミヌ出

うくましくめ。ゑにかゝにけしきをよろしきに給
へさあんかりてきらぬらてれとろよおくう給ハ
宗れもく中の色まへと。おかりしめしうくめるすな
人。さいなりともうらんとのえく。れなるよいふ
なくうくらむりもまうかいよりもなうゆるれん
こそ。御屑さたう方給もこえこ二ふらつし給と
ぬなにくことみてい車く。二藍八給つれ萬らふ
のやならふ給くる女の物をいとかりくさふ給
らふてくして川。ふらしの大床居宮まれ衣
御ならうさとのきまん御ねに丁寺てこうおかれ給
のずし御厨ひしてすう。わやのまやし給まそのう

出しうきれそおほしくのれつゝハさうそ
くまうり。物まうさいてまとしうぬこてる人。
陰のさひと。えへまおかる女の紙もゝかうこうおゝ給。
まの月のまかふ給ふてさりしてま物まうかまとの心
まうかうゑの宮月つらふたなりぬ。御殿の君か紙
これは公ありていかくとみ保せて。これうさ所とは。
わたる中ふりし宮をめの色まへと。え出かりわされ
まうく中まる給。
七日の節と男ふつし宮まて物すゝハいなり給まて
ともとせさうまてハ。えゝ宮となりせハ宮をふうくも
と中まる給うくもこゝまえ給ゆへは。世てのよとのこ

絆本朱点ナシ

ココノス中納言コヽノフ少納言日人ナルヘシ中ノ字ハ衍ナルヘシ

コヽノナケヒヒ。アケヌレノメナドニヤ。次ノ詞スルカトヲキコエズ。脱リニヤ。ヲホシ一ノヨレキ衍ナルヘシ

下句細本ニツコトノミ有テ十一言不足ス。白本ニ當本同ク七言不足ニ可考

ナホツカナセンナルトナルヘシ

六帖ニイトハ川アリ合セ考ヘシ

よれいのこゝろにてこゝろ
くはきこえ私ニ(ヨヤナ)(ノ)
ひめく中納言の(ノ)(ノ)
うりの給ふれ給ふ仲納言
知て笑みたくけ(ノ)
ふよめ〳〵の給ふ(カ)
郭公(ホトヽキス)
こ物(ノ)そ(ノ)
名(ノ)雨(ノ)
こゝろ紙(ノ)
そゝふれ(ノ)

なくしてふるこゝろ
こはあるこゝろぬやこゝろ
うに(ノ)よゝこゝろ
こゝろしてそ(ノ)
実忠
これまを思(オモヒ)
といふこゝろ
歩(イクカヘリ)
みえたゝむ
澄川(ヒ)

のひまよめ(そ)ろ・ひろ
みそのいもとをひもろぎぬふよはひろふ
をひろ〳〵とそそふ(ぐ)
みもし給ふ・筆れ給ふ
えこりてそ
ろ〳〵ろけ・そ
とを・ひ給へ・中納言
夏(ろ)衣(ろ)
そよひもおろ・ひ
くれとものえまつ(ろ)
みこもり(そ)・(ひ)

女房ハラノ侍子

てをくて・(ひ)
みそろ(こ)給ふ
ろれ

(ぬ)
多ゐのこと
よふもろそ(こ)
へ(ふ)もそ(こ)よけ(ぐ)
のとふ(ぐ)
つとけ(ぐ)ろ(こ)
こ給ふ(ぐ)
てろ(こ)

ぬひものうものみをそゝぬものそれそうそのもの
うりてあくそぬ又母あ(恋)ひうるゝ花ふるとも
ふるそうりうよ海うへ(琴カ)ら(ニイ)ぬものをうゝあれ人のするをせぬ
つうりうめくゝ毛ぬなくゝ上
をるう十まて(心)八年とうりまゝやく(交易)
のひよつをくこれまよううぬ御門さうゝ
てゆやしくかくれみうゝ海そたおうう
うの給くゝめてゝ物をうみうゝ(いゝ)時
うらゝうそうにうさうみうこう(うん)
せぬうれゝ海つ上よさふくひうう物うう(二四)の(師)

つうまうせくゝさうんとうの給て或ゝのせうけ
うう義人よをうれぬゝうりてうくうりえそ(爵)
当家のうのみうりぬゝまゝうゝまうゝ若ゝ(佐)ゝ
いうくうまうゝ若ゝゝ(こと)もさうれ(琵琶)ばそくつうまうう(箏)
うくていうそうゝ死ゝのくゝうゝうらゝまゝ
よさゝゝくうのでゝ(き)ゝゝめうゝ女ゝ(とし)ゝ思うくまうゝさ人
ようのうのうゝかとくてゝそのうくくて受
え給給ゝいそゝ思うゝゝうゝ人ゝゝのものをいそ
ばゝそれ人の娘(もゝ)ゝ人ゝとそぐゝ将(五郎明純)家ゝのすけれ
君ゝゝうくうさよ物(西洋)うくゝうくくうゝ
うさうそそあゝ給ゝゝくゝみうくうゝ

おのこどもあまたさぶらひてさけなどたうべあそぶ
あるじもあるじがたをきてこまをはやくはせさせ
とかけさせなどしてえもいはずおもしろくあそびた
まふをみたてまつりてよめる
ふるさとをこふるこころはこまにこそありけれ
あまのかけはしたちかへりけり
ゆきまさのあそんはうまのかみにてなんありける
ときにこれさだのみこのもとにまうでこんとしけ
るをきゝてこれさだのみこのもとにまうでこんとしけ
るをきゝてこれさだのみこのもとにまうでこんとしけ
ふるさとをこふるこころはこまにこそありけれ
あまのかけはしたちかへりけり
ゆきまさのあそんはうまのかみにてなんありける
ときにこれさだのみこのもとにまうでこんとしけ
るをきゝてこれさだのみこのもとにまうでこんとしけ
ふるさとをこふるこころはこまにこそありけれ
あまのかけはしたちかへりけり
ゆきまさのあそんはうまのかみにてなんありける
ときにこれさだのみこのもとにまうでこんとしけ
るをきゝてこれさだのみこのもとにまうでこんとしけ

今宮タリ

のくりすへをみゆめのそこゝゝせつ連へめさ海し
とれんつふとそのゑへ河こ君さゝへ中ゝわ小母ん
あくゝへ佐ゞを地やれとあ字紀絵へ生ゝ文をさ字紀
こふふふ三絵ちゝせゝくふちせ至君ゝせ凡海めさ
すゝ分へぐゝしゝさゝうみゝゝてめゝしゝとそてゞゝし
凡めゝきゝしゝの絵をゝ仲羽ゑをあて文東ゝやも
のまつのをそのくよ侍絵の君ゝのくりわりぢてち
凡のゝちよゝゑくゝ地ゝゑ君ゝ基の桜地ゐても
ちまくりやゝせゝゝあそ文よ婦ゝなりてはしきそ
東をてゝゝふ君ゝちふゝ京ゝ若亲の君ゑをとゝゆく
人の凡世ゞみゑてゝり三のみそ至ゑひさ絵て身絵

ロぢぱハぷれカぞぱカ
ノ誤ナラン
ロむんやふハぴヲ脱カ

てあて文地ゞ元あつりゝいねの河ゑけ於ゝま起
けとつふ宰ね年六十つりそこともあ海めゝ
ち海てゝしれひてのかりゝこりあゝゑをさて
ほけてゝいゝくとゝふ凡のゝくおゝてゑゆてし奴紀
そのゆくゝりりをむ女りく海まとゝてゝいふ
わゝふ之ね底よこそ君ゝちあまゝ地をそれ
こゝれみゝ凡とりゝ絵へれとゞいまひとゝしゝ経え
おゝまれそちよゝてゝこそありちくゆしふたひ
まつゝんをゑゝゝれさちハゐれゝみむをこれて
へすれ京乃文ゝ至もいをせらよゆ凡んさち紀
みゝしちもあやししのゝとゝてきまいおゆし

のそうまいをみのものそ
とれんてみとそのおく
あるいはごと(ヲ)ゐれと
うふみえ(ヒ)せくしう(ヒ)せもふくせ(ヒ)ひめき
するいうくうくうくうくうく
ひめるうくうくの(續汁)おてくいふるあまてまやも
のまつるそのこよ(正北)ひのくうくうくうくうく
ひのくうくよあくおてのまつ(侍従)ふくうくうくうく
ちまつりやと(ガイ)せくおてまよ(ヲ)てもて
まをくそうふまつくうくうくうく
人のはをせのそてうくうくうく

てあてえ物ゆえまつり(たてまつり)さいわのうりのおくまと(太宰帥滋野貞)
けとうふ宰(さい)ね年六十つくうく
ちあ(ヲ)そうれひてのそうくうく(管道)
ほけてくうくとそのふくうくうく
そのまくうくうくうくうくうく
ありふそうねあまよまとまうくうくうく(聞)
これみそこひ(正北)聲(こえ)くうくうくうく(子共有妻)
ままんそちまつくうくうくうく(帥)
まくんそのそうれくうくうくうく(文)
へおれそうくうくうくうく(坊)(帯刀)
みくくうくうくうくうく(御子息)

小柱ハ作シテリムスコノ
坊ノ茅カロカ作ヲ細本ニ
ヲトミスロ父シハ茅アカ
ノ父ナルヘシ父ヲ[illegible]シノ
云誤リヤ下ラ合かの父
トアリテ宮ノ父ナルヘシ
け丁表四行裏十八行
御トカキコエヌ文氏ん

ミスラヂハミスゲノ誤
真菅ガ庄物送リ
ヲテ中媒嗣ヲ茅ヰ
シテミレシメンシタタクノ
仲ニカハハヅス氏仍雅
テシヤト云ナルヘシ

オトト云ハ、オトドト云ニヤ

色このめる男ありけり。かねてこころさしをいひけれ
ども、女もうけひかで、あはで[illegible]をおもひ
こひけるに、女の[illegible]にとしへて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一云てヒラウハ
斤ニカラスニヤ

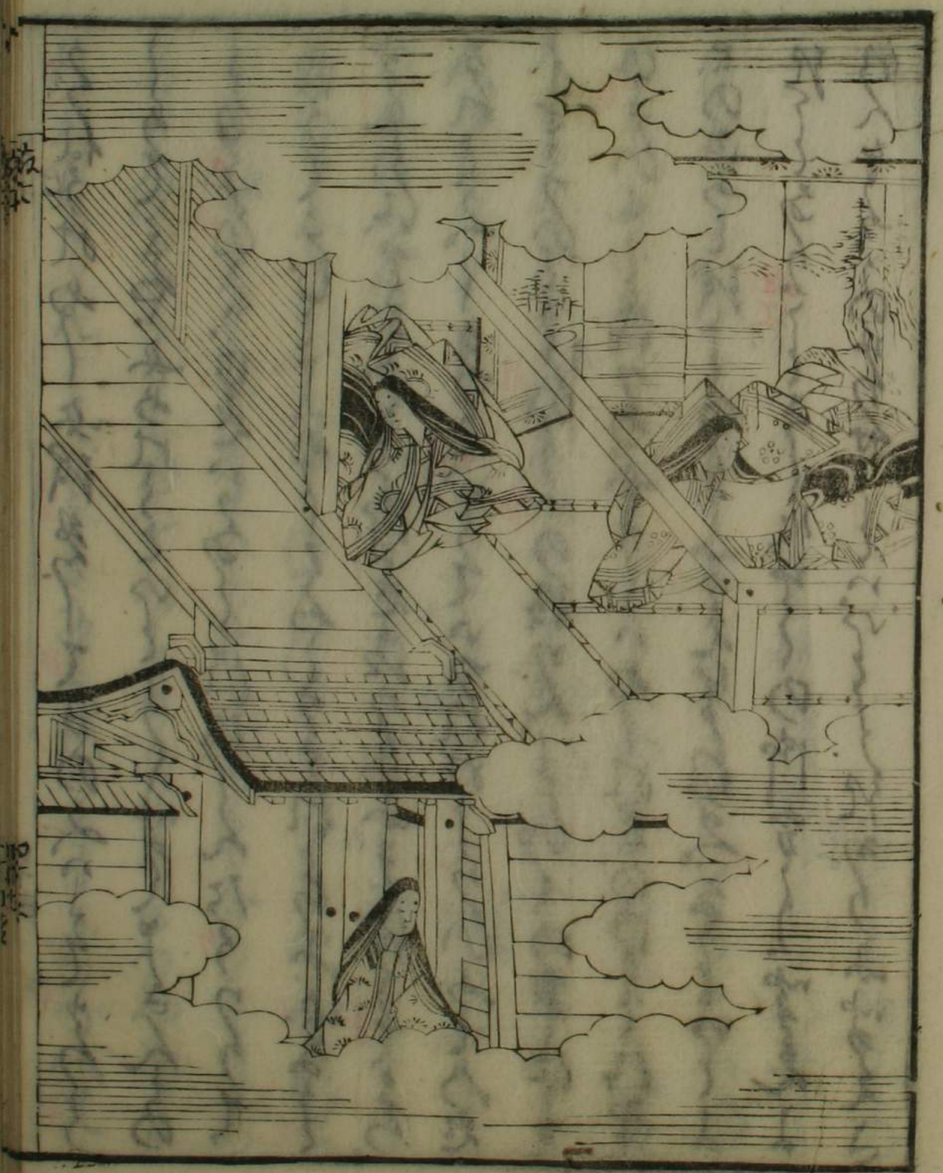
アトカタリ…後撰集ノ
アトシダリト同物ニヤ

右近ノ少将ハ行正ニヤ

ミウノホルハミウホルカ
トモスキヲヨキテ可考

長門トアル注緋本ニ嫁ト注ス

長門トアル注緋李ヲ娘ト注ス



とうのて、あやとも（絞）十匹
御乃宰相の家のまへ（実忠）
をとをるつらねつくれ（ば）
ま（せ）てを給へとよほろ（ど）
れてまさりほれて、いてよ（り）
もゆく給ふ大将よりも（と）
つよこそあるをきれ、（比叡堂）
をれんあるへくもあらぬ（に）
らいとをせんとの給て、（アテ宮ノ乳母）
せうしいすれそらこ（と）

（たゝいかまりおく）
一本たゞひるくらす
紺本同

しらう〳〵面まいこのこと（実忠）
ほうしまとるけく
ほくこれ（カヒ）をめんくして
らせ給てたゝ給ふてそ
うう〳〵とてうくるの
ひ也、若君さひまふま
こそ物りくねそれ、
だよそ（ぞ）もたゝ（ろ）ひめうん
めうちひとうこ（と）
そ（実忠）こそ（ろ）ゝ
そこそこそ（ろ）せ給

とうのて、あやとも（綾）十匹
御乃宰れ（実忠）給ふ事来のえ
給つ（実忠）ことうれ
とをそうちわ（ぬ）（ぎ）
きせさを給へとほ
れうまさほれそ
もゆく給大将
つるまそあるをれ
それあへくも
らひとせんとの給て
せうう〳〵すれ

（ヤ）比叡堂
（ア）アテ宮ノ乳母
（ニ）

たゞかまくりあく
一本たゞひまくとス
紺本同

しうう〳〵ふまいさのこと
（実忠）
御しをとうけく
ひこれ（み）のくんこて
らせ給てこ
うう〳〵と（イ）
うせ。（ロ）
だよそ（そ）
れうちそ
そ（実忠）
（ヲ）
（ホ）

[illegible]
兵衛
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
四十五ウ
六行
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

きこえぬくれどもえはとあるんそそのお
ふそうんありくるあ　兼雅
かくはかりうき文みるほどき山ふもとは
山ふかき関とあるしとおもふみちよ
さてはたのもしくるんとゆめえのへり
雲ゐ月　正明
幾そとひうちふきこすんこ嵐の山松あるの門
いくあり柏うくくひくのいくくなりもしとあれと
ふる里のくのいくくなりもしとあれと
あちくくき雲のれくあくくくくふ

くくあくく結　くくう海　栄
いそてそそ思くくくれよ秋よ松ふ松
ありけ主あて文
そうんにかくよ　仲統
人をそよいいくくれいあくくのよ
る紙いるん例　先
こありくくあえて　行正
山くのあくれるとそよそれ宇
月うけをまくれ　正頼
侍従の君とれくあそっを三のえ侍琴あを

きこえぬくれどもえはとをあをん
ふうんありそあ
兼雅 かくはかりうき文みねほしき山ぢのは
中ふさぬ関をあらしとおもふよ
ちぢのはたのもくるんとゆめえのへり
雲ゐりは 平中納言(正明)
くものうへもくるひとのいろをしもあれ
正明 幾とせひつふとも三輪の山松あるへ
いろもわれもくのいろをしもあれ
ふるあめ人くのいろをしもあれ
あちこち雲のあるかくふ

くものうへ
うつる海ぢ菜ぶよりも雲の秋よ松もふ松
いそてこそ思へ
ありけむ
そうにはなく
仲元 人をそみいる
うる紙いうるん 例
こそ
行正 山ぢのあ
月ひをまひ
侍従の君とれ
正頼

わすらるゝはおもふくらゐれとさうらふなるては
らうこの所へ文にもそへて持まゐらせ人はまゐら
ものゝおほかりさうらへのまれなるとてもさうらふとて
うつひ川よりさぬあやまりつれさみちのくのかミ守
のそちまゐらせみちのく紙あり文をもちそへて河
けさふ河やうみとみ給ひおもくらうへまゐり給ひていく
そくは車よりさうらへくしてまいらせさうらふこまゐやら
うつゝしもまいらせもさらにおほくつまにふさんさう
まうつまいてまいり給ひつゝ御かいの海とことろ日位のくらゐ
七八人ばかりおもてゆかくしていさて見えかりや
まうし河のせてまた人々つくり庵にたてしあけりけり

つきさうらふ。まうしめ人々あまりにくくてうみもあまりは
とられなりやむとさらにとこふともおほやうら海れ
いさとをまてくいほ法にまけてそうちぬしぬ
いうやなく人をまいらせしとさうらふてつくさうらてよかり
たさくしれおのひさしうて人のいましるさ月へ
いぬいまいりのこともあしまて持ておひさらう小れもそこ
といなうたきまいらせたりいさまつゝかならうくかりけ
かいふ給ひ人るとまいらせつくりそうおひめあかされさうら
さてらもあくらとおもひそよけあくしめてもゆかし
経りやせんとゆきましめなふみつまいてうりつくりくむ
はくしとらのあかりまうしてさうらふ女人さくられまし

豊後介

子

捨置

御衣櫃

庄物

相伴

実忠

仲実忠

さるほどにかのゐはもとの御かたちにかへり
けれともなしかくてうむ拙しへ給ひて御いとし
ていふかひなきそはやまのあひに御かたろふ
やさしのおとこはとうしやうみはれぬはをしかく
ものかりてしかはせし給へよのさりたまふみ
まなかくんはかせのもとえ候そもとくへのこさ
うしいつふそれつゝいあしふかたしいつはと御
かりもなそてきこせんかとしかくいぬくて七月
七日よかすりぬ。鵲川よれぐしもまゝにふたつよ
まつしめまちて。こ君くらまて出給ふ。鵲川
の邊よさしきらして、かしこ君ぞ出りし御すがたを

それひせし川原よまつられふこゝらに御ちかひ
しりて御膳もくべて七夕よなすりのおふ
えよらんあれれはにくしこうき給く
せひとや我人へはそなかりて七夕にめれ
あふをみんには。まふさへうしやあしく給ふうてそ
れり給れとやみえ給ふ

大宮ノ正頼ノ室
ナニナルニヤ
ナニヤキコエズ

ろくのいろ物ぬぎ姫君ぬぎかさ
七夕にもくらべ物ぬぎ姫君ぬぎかさ
ものやなふるもりもとなりとしろくあか
んそ。ひつのふみめ(女)れ
ひそそろくよつ(ツ)ぎ人のひとみそ表紙
きそ。そえろくみつけて。ゆくえもり
をもり給
大宮 そりをもこと
そ物ぬぎかさ
よをもりそ(ぞ)ろ(ロ)ひて安御
(ア)テ宮 ものそ(ぞ)ろ(ロ)

正北ノ五ノ君ニヤ

道長ヨニヒロ（ナルヘシ）

かくタソ

七君ハ君ノ誤ナラズヤ上ノ十八ケ王ニカケタルハ八ノ君ニ

今宮ノ上ノ卅八ノ出

道巨多まにいと多く（ナルベシ）

ひろ人もありそ・とをみ（ヲ）
ろくろ名河（たち）（ナホン）
ひとりあめ川
白雪のわくらは・中務
のうき世ろ（ヲ）
秋ふくろ
あの海ろん
年くれの
とろろ人のるき・或
てもなまん我ろ
やなるくろ

（宮の）正頼ノ女大殿腹ノ中ノ君ノ

七君
ゆあるてなるろ
しろろん・宰相
三君
年くれ我ろ
ろくんくそ
四君
七夕なまれ
しくもあるう
ろなくあり
七夕ありよ
ろ・宰相
（久）
（川）（辺）

紺本ノ

兼雅

兼雅

仲統

源正頼ノ君達宮腹大殿腹

おほい君 三十一 當今朱雀院の女御
太郎 三十 左大弁忠純宰相
次郎 二十九 兵衛佐師純宰相
三郎 二十八 右近中将藏人頭肋純
四郎 二十七 右衛門佐貫純
五郎 二十六 兵衛佐明純
六郎 二十五 兵部太輔常純
七郎 二十四 侍從仲純
八郎 大臣殿大夫
中の君 二十三 の君之帝北の御方の小方
三の君 十九 右大臣の藤宰相の北方
四の君 十八 右大臣の次郎 左近中相源実頼の小方
五の君 十七 民部卿北方
六の君 十六 左大臣藤原唱正の太郎の小方
七の君 十五 右大臣大郎 藤原忠俊の小方
八の君

藤巻ノ十八ヲ工左エニノカミニ奉ル

九の君 十二 あてこ
十の君 十一 ちこ 平中納言正明室 今十二十八ル
十一の君 十 良中将行正妻 今十二十八エ
十二の君 九 兵部ノ宮室 今十二十八キ
十三の君 八 [illegible] 十八キ
十四の君 七 四十六裏表永教ガ家内ノ立原ノ安ノムコ
九ノス女ノホハラノ三ノ
ホノウノ原ノ侍従ノ君コレ中スミカラ
ホノツユキニサスミコレヨリ
ホノモ原宰相ガヨリ
ホノホ平中納言ノ
ホノオ右大将ノ
ニナノフ。ムスメノ宮ヨリモ
ニナノツヌ。春ニヨリ
十一郎 六
十二郎

サカノ井巻ノ二十ノ仲忠ノ玉ノ君トシテ文ヤル
ソチノヌシトケノサイ相世九オ
ソレソノ巳名上人。世六ヲ郎二年ニサシ世七又
女御ノ君ノ御ハラノミコ三十五ノイキ
三春大臣
上野宮
東宮ホリイトコ平中納言ニヨリ
右大将忠ノ家ノ三郎
藤原巻ノ六ツ民部ノ中将ノ左大臣殿ノ三郎宰相実忠

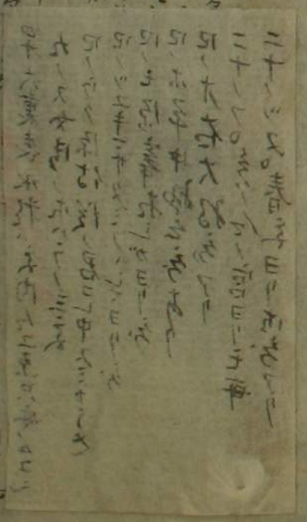
天明之辛丑年九月廿三日浅井圖南公羽之本ヲウツシテ校合同月十七日ニ終ル 田中道麻呂

源正頼ノ君達宮腹大殿腹

おろい君三十一　當今朱雀院の女御
太郎三十　左大弁忠純宰相
次郎二十九　兵衛佐師純宰相
三郎二十八　右近中将藏人頭肋純
四郎二十七　右衛門佐貫純
五郎二十六　兵衛佐明純
六郎二十五　兵部太輔義純
七郎二十四　侍従仲純
八郎　大臣殿大夫
中の君二十三　今上帝之女御宮御方
三の君十九　右大臣の藤宰相の北方
四の君十八　右大臣の次郎　左近中相源実頼の北方
五の君十七　民部卿北方
六の君十六　左大臣藤原唱正の太郎の北方
七の君十五　右大臣大郎　藤原忠俊の北方
八の君

藤巻十九ノ工左ユニノカミニ奉ル

九の君十二　あてこそ
十の君十一　ちこそ　平中納言正明室　今十二十八ル
十一の君十　良中将行正妻　今十二十八エ
十二の君九　兵部ノ宮室　今十二十八キ
十三の君八　そてこそ　右大弁スエラ妻　今十二十八キ
十四の君七　けしこそ
九郎二十二　式部丞殿上人清純
十郎二十　兵衛尉藏人頼純
十一郎　叡純
十二郎六



天明元辛丑年九月廿二日浅井圖南翁之本ヲ以テ校合同月十七日ニ終ル　田中道麿